

# 百味講たより

令和3年11月発行  
発行所大本山増上寺  
百味講報企画部  
発行者 山本築老和

第25号



内侍長  
小野 静雄

## 百味講と御忌大会

百味講、大本山増上寺の諸行事にご奉仕されている中で、御忌大会での講中が私には印象深いものがあります。

御忌大会のハイライトといえはいうまでもなく、唱導師上人がお勤めいただく大法要であります。その前段になるお練り行列も見事なものです。お練り行列は大門から出発します。その行列の長さは唱導師上人を中心に前後約百メートル近くになるときもあります。金棒、木遣、御稚児さん、随行される檀信徒の方々、色とりどり法衣に金襴の七条袈裟を被着された随喜上人の方々、その中に袈裟でお供物を捧げ持つ百味講の皆さま、江戸の昔より続けられているお練り行列の見事さは風物詩としても記録にあり、錦絵にも残されています。

長い行列は大門から出発して三解脱門いわゆる三門をくぐり、桜花爛漫の境内をゆっくりと進みます。大殿前での庭儀式が厳かに勤められ、その

後お練り行列は大殿に入堂されます。お供物等捧げ持った百味講の皆さまは本尊様にお供えして裏堂に下がります。これまでの動きが百味講のお役目になります。

お供物は二段重ねの大きなお供えのお餅で、さぞ重たいだろうと思いますが、講中の皆さまはそんな様子も見せず、ゆっくりとした流れの中を捧げ持ちお供えして裏堂にさがられ、講中のみなさまのお役が終わります。

四月の初旬とはいえ汗をかきながらの御大役を終えられて安堵されたご様子を拝見しております。大変なお役だと、裏堂で控えております大僧正台下と、只々有り難く合掌しております。

先の成田台下そして八木台下に内侍長として仕え、講中のご奉仕を垣間見るにすぎませんが何とも力づくよく感謝に堪えません。百味講の発展を祈念申し上げ、今後とも御本山をお支え頂きますようお願い申し上げます。



### 大本山 増上寺 御用達 百味講

創業寛政二年(1790年)八代目  
**(有) 石政石材店**  
眞田 貴志  
〒108-0071 港区白金台4-5-7  
TEL 03-3441-1483 FAX 03-3441-3156

思いとどける ところ伝える。  
**(株) 日本香堂**  
小林 日出男  
〒171-0014 豊島区池袋3-18-12  
TEL 03-3973-7111(代) FAX 03-3530-1238

お花で思い出を永遠に  
**(株) 花 幹**  
三須 健  
〒143-0024 大田区中央8-31-11  
TEL 03-3755-2120 FAX 03-3754-4687

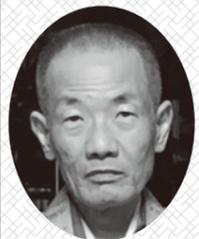
旅のことならすべておまかせください  
**東武トップツアーズ** 東京法人 東事業部  
茂呂 政明  
〒103-0025 中央区日本橋茅場町2-10-5  
住友生命茅場町ビル2F  
TEL 03-6667-0593 FAX 03-6667-0568

葬儀・式典企画運営  
**富士典礼**  
木村 光二  
〒142-0031 品川区豊町4-3-17  
TEL 03-5434-2210 FAX 03-5434-0860

葬儀のご用命は  
古い信用・新しいサービス  
**(株) 牧野総本店**  
豊島 洋子  
〒108-0074 港区高輪1-21-1  
TEL 03-3445-0506 FAX 03-3445-0508

懐石料理  
**(株) 味ごよみ一心**  
廣中 久見  
〒105-0011 港区芝公園2-6-8  
日本女子会館1F  
TEL 03-3438-1041 FAX 03-3438-1044

各種ご用命は  
御本山御用達の百味講  
各店へ!



# 「仏具における銅合金について」

株式会社瑞祥浜田 浜田 明男

以前、百味講たよりに投稿した時は仏具とは切り離せない漆について書いたもので、今回も同じく切り離せない金属、銅の合金について書こうと思います。

仏具の銅の合金として一般に知られている物は青銅(唐金)と黄銅(真鍮)でしょう。青銅

は今では銅と錫の合金とされています(鉛と亜鉛を混ぜる事もあります)が、明治の初めに

編纂された「銅器之説」によると、江戸後期から昭和三十年頃まで京都で鉄瓶や銅器の製造

において有名であった竜文堂によりますと、青銅は銅と鉛の合金とされていて、これに錫が加

わった物を響銅(佐波理)としています。響銅は鳴金とも言い、非常に綺麗な音が出るのが

特徴です。ちょっと面白いですね。響銅は今も昔も銅・錫・鉛の合金で、ときに少量の銀を加

える事もあります。青銅(唐金)は仏具として

は仏像・鐘等に使用されるのが一般的で鍍金により製作されます。原型通りの鑄型を作り、溶

けた合金(湯と言います)を流し込み作る方法です。鑄造の仕方としては、焼型鑄造法、蠟

型鑄造法、生型鑄造法等々があります。黄銅(真鍮)は銅と亜鉛の合金であり、青

銅と違い今も昔も変わらずです。日本における真鍮の錬製の始まりは、滋賀県甲賀地方に広

徳寺と言うお寺があり、近くに藤左衛門と言う貧しい百姓が住んでおり、働けど働けど生

活は苦しく村を出て行くしかないと考えたが、庚申様を深く信仰していたので庚申様に

おすがりしてみようと思いい、文禄二年(一五九三年)正月二十三日広徳寺に籠り断食して

日夜一筋に家運の隆盛を祈願したところ、満

願の夜、枕元に七才くらいの童子が現われ、

銅に亜鉛を混ぜる合金の作り方を細かく伝授した。夢告の通りに鑄てみれば、黄金色の光

沢をした合金ができた。これが始まりである。黄銅(真鍮)は鍍金・鍍金どちらでも使

用されます。青銅(唐金)がどちらかと言えば、屋外で使われるのが多いのに対し、真鍮

は屋内(五具足とか塗香洒水器他)で使われるのが多いです。五具足は極上品等になれば

唐金製もあります。鍛金技法で作られる仏具で一番有名なのが鑿子で、黄銅板を金属の伸

展性を利用して金槌、金床、当て金等を使って何度も何度も黄銅板を鍛えて伸ばし、形造

ります。鑿子は寸法により使う黄銅板の大きさがほぼ決まるので、一廻り大きい鑿子

用の物を使って作った鑿子を重目、二廻り大きい鑿子用の物を使って作った鑿子を二段上

がりと言います。参考文献 銅ものがたり

中村直勝・和田忠朝監修



## 大本山 増上寺 御用 達百味 講

浄土宗  
袈裟・法衣専門  
**(有)吉野法衣店**  
吉野 輝雄  
〒160-0012 新宿区南元町17  
TEL 03-3355-2168 FAX 03-3355-2204

御袈裟・法衣専門  
**太田法衣店**  
太田 祥二  
〒121-0076 足立区平野2-15-16  
TEL 03-3883-3225 FAX 03-3883-1634

伝統の技  
三代にわたる信頼  
**(有)古島法衣店**  
古島 浩  
〒111-0041 台東区元浅草4-2-1  
TEL 03-3842-1289

総合印刷  
**(株)エスプリ**  
阪本 順一  
〒135-0033 江東区深川1-6-7  
TEL 03-3641-1891 FAX 03-3641-1923

仏壇・仏具  
**(株)瑞祥浜田**  
浜田 明男  
〒111-0042 台東区寿2-9-13  
TEL 03-3844-9473 FAX 03-3844-5017

表装・額装・襖一式  
**石森表具店**  
石森 一  
〒108-0073 港区三田1-7-2-102  
TEL 03-3451-3138

佛像彫刻・文化財保存修復  
**佛師 山本 築老和**  
山本 築老和  
〒145-0063 大田区南千束3-28-5  
TEL 03-3727-1122 FAX 03-3727-1122

仏壇・仏具  
**(株)安田松慶堂**  
星野 家康  
〒104-0063 中央区銀座7-14-3  
TEL 03-3542-5771 FAX 03-3546-2140

増上寺謹製・三縁クッキー  
**(有)ポエム洋菓子店**  
安部 嘉祐  
〒174-0046 板橋区蓮根1-18-11  
TEL 03-3966-2324 FAX 03-3966-2398

音響・映像  
**(有)ボブス**  
豊田 浩人  
〒145-0067 大田区雪谷大塚町7-10-703  
TEL 03-3729-5148 FAX 03-3729-5149

# お知らせ

## 講員動向

- 百味講講員としてご活躍された平野屋営業部 井上様のご退任されました。  
長年のご尽力を感謝するとともに今後のご活躍をお祈りいたします。
- 百味講講員としてご活躍された協栄社 藤網様のご逝去されました。  
謹んでお悔やみ申し上げますと共にご冥福をお祈りいたします。

## 講元ご挨拶

百味講講元 山本 築老和

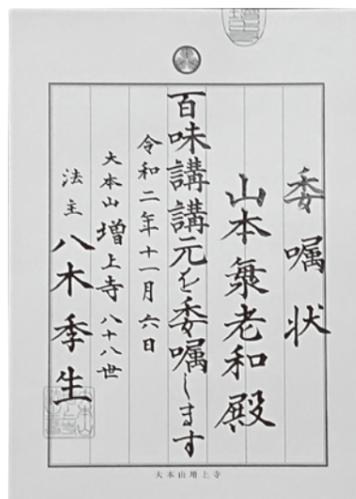
此の度安部講元の退任に伴い、昨年十月の総会におきまして、講員皆様の御推挙により、新たに百味講講元の大役を承ることとなりました。

もとより若輩の身ではございますが、大本山増上寺様の護持発展に寄与し、百味講の興隆に努めて参ります。

これからも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

また長きに渡り講元としてご尽力されました、安部前講元には心より感謝申し上げます。

合掌



## 「掛軸のお話」

石森表具店

石森

一

日頃より大本山増上寺様、各御寺院様には大変お世話になっております。  
石森表具店、石森一と申します。

百味講たよりには早いもので2回目の寄稿となりました。  
今回この百味講たよりは何を書かせて頂くかと一顧り考えたのですが、生業としております、掛軸のお話をさせて頂くかと思っております。未熟者で大したお話も出来ませんがほんのお目汚しですが宜しくお願い致します。

一言に掛軸と申ししても色々な仕立てがございます。仕立て、と言うのは読んで字の如く作品をどのよう仕上げていくのか、と言う事です。お

茶室に掛ける物なのか、床の間に掛けて普段から目にする物なのか、そして御名號のように仏様の物なのか。当然お客様のご意向に沿って色や形を決めていくのが筋なのですが、一般の方に時々聞かれる事があります。

中の作品は表具屋(私自身)さんが書いているのですか?という質問です。先日もしぶりに会った学生時代の友人から『晋から字とか絵と



山梨県法蔵寺様蔵幽霊図

何か描いてたもんねえ」と言われましたが少し勘違いしているようで、手前の仕事は作品を立派に見せるお手伝いであり、あくまで裏方なので見解としては面白かったのですが、まだまだなかなか一般的には珍しい職業なのだと感じました。

話は少し逸れましたが、その作品である書画ですが当然ながら掛軸や額において一番大切な部分です。御名號であったり、有名な書画家の作品であったり、はたまた息子さんのお孫さんの絵だったり。その方にとつて価値や感覚は多種様々ですが、先日頂戴しましたお仕事に少し珍しい作品がありました。幽霊画です。幽霊、と言いますと四谷怪談のお岩さんのようにあまり気持ちの良くない雰囲気になります。江戸幕末から明治にかけては割りと多く描かれていたかと思えます。



増上寺八木台下御名號

とここで海外のゾンビ等には足があります。日本の幽霊には足が見当たりません。足の無い(見えな)幽霊画を最初に描いたとされる絵

師がその円山応挙だとされているのですが、皆様は何故幽霊には足が描かれていないかご存知でしょうか?

① 反魂香という焚くと魂が帰ってくるといわれるお香の煙で足が隠れている  
② 夢枕に亡くなった女性が出てきて慌てて描いたので足まで間に合わなかった  
という説が比較的ポピュラーですが、理由としては諸説あると聞いています。

先日その御寺院様にお納めした幽霊画も同じような構図だったので、手前が諸先輩方からお聞きした理由は少し違いました。そもそも幽霊画を所有していたのは関西方面の豪商だということです。潤沢な資金を持つ方々が有名な芸術作品をコレクションしているのは当然至極なお話なのですが、あまり気味の悪いモチーフでない幽霊画を何故持っていたのか。それは

幽霊には足が無い↓お足(お金)が出ないからだというのです。これまた諸説ありますし、真実かどうかはわかりませんが、言葉遊びとしてはなるほどと思ってしまうました。確かにこちらの御寺院様の幽霊画が我が家に来てくださった時にはほんのり良いことがありました。夏場の怪談では主役を演じる事が多い幽霊ですが、こうして考えてみると結構縁起物とも捉える事が出来るかもしれません。

末筆ながらこうして様々な作品に触れさせて頂ける機会を与えてくださった増上寺様、そしてこの幽霊画のお仕事を頂けた法蔵寺様、また全ての御寺院、関係者様各位に感謝の念を伝えたく思います。ご迷惑をお掛けすることばかりですが、百味講共々今後とも宜しくお願い致します。

# 百味講アルバム2021

## 研修旅行(大井川方面)



SLにも乗りました



復刻されたゼロ戦



静岡側からの富士山



運転手さん、ガイドさん、さだきち君と

# 百味講アルバム2021

## 御 忌



大殿は屋根瓦葺き中



全員でパチリ



コロナでマスク姿の行列



ボックスはコロナでもいつも通り

## 研修旅行(大井川方面)



今回は講元は不参加ですが、ご挨拶に登場



藤枝の料亭で